

# 矢板のお城めぐり

……

⑥

## 最終回の今回は、6つの城をまとめて紹介します。

### 堀之内城 (矢板市長井)



塩谷氏の家臣、渡辺信濃守の居城で、城域は旧長井小学校一帯の約6ヘクタールにも及ぶと伝わる。天正17(1589)年10月1日、那須方に攻められ信濃守は討死。

### 山田城 (矢板市山田)



天文18(1549)年頃、山田筑後守辰業の築城と伝わる。丘陵地の最高地に南北に長い本丸跡(約50×90m)が、そして、三の丸跡の中心部に井戸跡が確認されている。

### 矢板城 (矢板市本町)



塩谷氏の家臣、矢板周防守長則の居城と伝わる。永禄元年(1558)、長尾景虎の多功城攻めの際に参戦し、討死。

### 館ノ川城 (矢板市館ノ川)



伯耆祢大権現縁起によると、朝業以前にこの地方を統治していた塩谷惟頼(前期塩谷氏)が居城していたと伝わる。

### 乙畑城 (矢板市乙畑)



15世紀後半に喜連川塩谷氏によって築城。後になって、小幡孫七が城代として居城したと伝わる。現在は、山頂に本丸跡の一部を残すのみである。

### 岡城 (矢板市片岡)



戦国時代に塩谷安芸守によって築城と伝わる。東西に約300m、南北に約150mの規模を持つ。内川と江川が外堀の役目を果たしていた。

## 記者の独り言

### 自然の恵み

花よりの団子の私、美しい物を見るのも好きだが、おいしいものを舌で味わう方がもっと好き。そんなわけで、十五年程前から、百五〇坪ほどの畑で野菜作り(農家の方から見たら、おままごとのような)をしている。いろいろな野菜の種を買ってくるが、種の生産地は、イタリア、台湾、中国、オーストラリア、韓国、アメリカなど、私が行ったところのない国ばかり。どんなところで、どんな人たちに育てられ、収穫されたのか。もし種が言葉を話せたら、大昔は河原だったと言っ石ころだらけの我が畑に蒔かれるのはイヤダと泣くかもしれない。もちろん、国産の種も有るし、

インゲン豆、落花生は昔から代々作られてきた種を分けてもらったものだ。畑には種から育てたカボチャやキュウリ、苗で買ったかんびよつ、いろいろな夏野菜や小豆、ささげ、黒豆。大好きなとうもろこしは虫(かめむしや蛾の幼虫)も大好きだ。家族が安心して食べられるように、作っている野菜は100%無農薬。虫退治は私の両手指と蛙さんやあぶらむしを食べてくれる蜂さんが担当しているが、多勢に無勢で、毎年虫食い豆が圧倒的に多い。しかし、一粒の種が太陽や雨や土や目に見えない微生物などの自然の恵みによって実ることを、おままごとのような野菜作りでも十分に感じている。(M・K)

山は引き返す勇気を教えた、人生も私には、退職してから山登りを始めた。矢板市から見える釈迦ヶ岳をはじめ、男体、女峰、赤雑の日光連山、日留賀岳、茶臼岳などを何度も登ることができた。燧ヶ岳や鳥海山など東北の山々も。今でも覚えていていることは、最初のころ、八海山神社まで登ろうと計画し、登り始めたところ、突然霧が出始め、あっという間に登山道が見えなくなかった。時間のかかる行程ではないので無理すれば行けないことはないとの気持ちが強かったが、登った経験がななく「危険を感じる」とき、山は引き返す勇気が必要である。登山で大事なことは、登り三

分の一、下り三分の一、帰宅まで三分の一の体力、気力が「必要」とのアドバイスを思い出し、引き返すことにした。晴れていても風の強いとき、天候の悪化が予想されたとき、寒さが厳しいとき、時間がかかりすぎるなど、何度か途中で引き返したことがある。また、登山する場合、最も大事なことは登山計画書が必要であることも。それと同じように人生も、その繰り返しではないのかなと思っている。それを思うと、那須の雪崩の事故はどのような判断をしたのか、大きな疑問が残る。少しでも山を経験した者にとって、やり切れない思いだ。このようにならない。(T・H)

(編集後記)「やいた応援かわら版」と銘打ち、お届けして早一年となるのですね。地域密着型で、老若男女の方々にお話や写真、アドバイスをいただき、感謝です。もっともっと埋もれた宝物、掘り出したいですね。皆様のご一報をお待ちしております。(M・W)